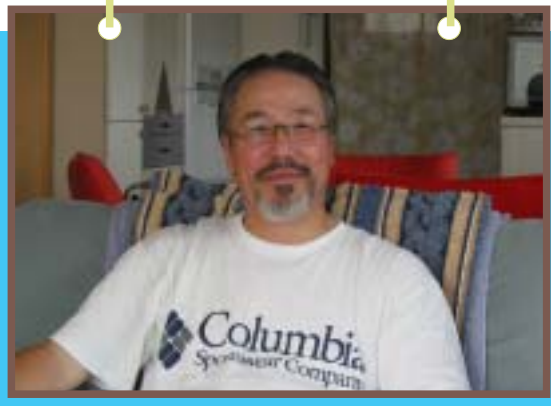
災害ボランティア活動を応援

山口幸雄さん（みどり野）

「災害救援ネットワーク北海道」を設立し代表を務める。「全国災害救援ネットワーク」副代表のほか、北海道のボランティア関係団体に数多く所属。地域住民の防災意識の向上や、災害ボランティアの資質向上と活動の充実を目指して、日々活動しています。



「被災地のボランティアの方をボランティアで支援しています。被災地では、被災者を援助する体制は整いますが、ボランティアに入った人まではとても援護できません。そこへ私たちボランティアネットワークが入っていき、ボランティアセンターの立ち上げや炊き出しのやり方など作業がスムーズに行くように手を差し伸べています」と、実に明るくにこやかな山口さん。

1999年に山口さんが設立した「災害救援ネットワーク北海道」は、全国組織の「全国災害救援ネットワーク」と「震災をつなぐネットワーク」の傘下にあり、「北海道ボランティアサポートセンター」や「北海道ボランティアコーディネイト協会」と手をつなぎながら、レスキューレンジャー北海道、スノーモビルレスキュー連盟、NPO日本救難バイク協会北海道支部などと連携を取り、救難要請があった場合に直ちに現地に向かう体制を整えています。

また、山口さんは全国各地域でボランティアに関する講演や炊き出し実習など年間80本もの活動と、災害時には現地調査と行政が手の届かない部分での救援活動などを行っています。

「各地区の災害情報は逐次FAXが送られてくるので状況は常に把握しています。現地で不足している物資があれば調達してすぐに発送します。この前の福島豪雨で、現在タオルが足りないという連絡を受けたので、全道の社会福祉協議会に呼びかけて集めました。これから送るところです」と話す山口さんのお宅には、山のようにタオルが積んでありました。

「今年は道内全市町村の社会福祉協議会やボランティアセンターを回って、その町にあったボランティア方法を企画提案しているところです。災害時に社会福祉協議会などを窓口に、地域で動ける若い人を集めて支援していく体制づくりのノウハウなどを教えています。災害は絶対起こらないとは言えません。もしもの時に、被災者が今日食べるもの、今日寝るときの毛布を迅速に配布できるように備蓄もしています。行政が動ける体制になるまでのつなぎ役としてやっています」とあくまでも、ボランティアや行政をバックアップする体制に徹しています。

「春の当別消防まつりで炊き出し実習を行いました。消防には当然予算はないので、自分たちで農家を回って野菜を分けてもらい、ボランティアセンターでお手伝いの人を手配してもらいながら作った豚汁500食は、あっという間になくなりました。

8月初めの教育委員会主催事業の岩出山町とのジュニアリーダー交流にも、子供たちに豚汁の炊き出し実習を行いました。おぼつかない手で芋の皮剥きからおにぎりづくり、できた豚汁をみんなでおいしく食べたことが、いつか何かあったときの経験になっていってほしいと思っています。

各地域のコミュニケーションづくりや、人づくり、町づくりをお手伝いして、最終的に災害時に地域が連携してやっていけることが大切だと思っています」と歯切れ良く話す山口さんは、今日もボランティア支援に全国を駆け巡っています。

広報「とうべつ」9月号　平成16年9月1日発行　通巻612号　編集　企画部秘書課